

2020（令和2）年度 福岡女子大学 一般入試個別学力検査

〔 後期日程試験問題 〕

国際教養学科

小論文

【 90分 】

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 問題は4ページから7ページにあります。8ページから10ページは下書き用紙になっています。
- 3 解答は必ず解答用紙に記入してください。解答欄は裏面にもあります。
- 4 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 5 試験開始と同時に解答用紙の**受験番号欄**に**受験番号**を記入してください。
- 6 試験終了後、**問題冊子は持ち帰ってください。**

問題 次の文章を読んで、以下の問一・問二に答えなさい。

そもそも知識人 (Intellectuals) とは、どのような存在なのか。(中略) ジュリアン・バンダの定義によると、知識人は、たぐいまれな才能にめぐまれ、道徳的にも卓越し、人類の良心ともいうべき哲人王たちであり、彼らは小規模の集団を形成する。ちなみにバンダの論考『知識人の裏切り』そのものは、知識人のありようをめぐる精緻な分析としてではなく、みずからの使命を裏切り妥協にはしつた知識人への仮借なき攻撃の書として読まれることがおおいのだが、にもかかわらず、そこに列挙された真の知識人たる人びとと彼らの性格から、バンダの知識人観の一端はうかがい知ることができる。たとえば、スピノザやヴォルテールやエルネスト・ルナンといった近代の知識人とならんとソクラテスとイエスがたえず言及される。真の知識人は聖職者集団を構成する。この集団は、まさに世にまれな集団である。なにしろ、この集団が奉ずる真実と正義の規準は、およそ浮世ばなれした、この世のものならぬ規準であるからだ。ここから、知識人を指すバンダ特有の用語がうまれる——すなわち *clerics* [元来「聖職者」のことだが、バンダはこれを知識人の意味に使った]。こうした知識人と、地位ならびに機能の両面で一線を画すものとしてバンダが対置したのは、俗人集団である。彼らは、物質的な利益とか個人の栄達に関心をよせるだけでなく、機をみるに敏で、世俗の権力におもねる凡庸な人間たちである。これに対し真の知識人は、バンダがいうように、「その活動が、現実的な目的追求だけに終わったりする人びとではなく、むしろ芸術や科学、あるいは形而上的な思索に喜びをみいだそうとする人びと、端的にいうと、非物質的な富の所有を求め、したがって「わが王国はこの世にあらじ」となんらかの

かたちでいつてのけられる人びと」のことである。

しかしながら、バンダのあげている例からもはっきりわかるように、完全に世事から退き、高踏的で、象牙の塔にひきこもってしまう思想家、それも抽象的で秘儀的ですからある話題に、極度に個人的なこだわりをみせるだけの思想家を、バンダは是認していたのではない。バンダによれば、知識人が真の知識人といえるのは、形而上的で高尚な理念に衝き動かされつつ、公正無私な、真実と正義の原則にのっとり、腐敗を糾弾し、弱きを助け、欠陥のある抑圧的な権威にいどみかかるときのものだ。「ここで思い起こす必要があるだろうか」とバンダは問いかける。「いかにしてフェヌロンとマシヨンが、ルイ十四世の起こした戦争を非難したか。いかにしてヴォルテールが、プファルツの破壊を糾弾したか。いかにしてルナンが、ナポレオンの暴虐を糾弾し、いかにしてバクルが、フランス革命に対するイギリスの不寛容を糾弾したか。また、わたしたちの時代では、いかにしてニーチェが、フランスに対するドイツの残虐行為を糾弾したか、を」。バンダのみる現状の問題点は、「組織的集団行動を求める情念の組織体」と彼がうがって表現したもの、つまり党利党略、大衆世論、ナショナリズム的軍国主義、階級利害などをまえにして、知識人がみずからの道徳的権威を放棄してしまったことにある。バンダはこれを一九二七年に書いていた。大衆的マス・メディア時代到来以前のことだ。しかしながら、バンダの慧眼がみぬいていたように、政府が、確保すべく奔走しているのは、政府を指導する知識人ではなく、政府の下僕となつてはたらく知識人である。この種の知識人たちは、政府の政策を支援し、敵対勢力を非難するプロパガンダ活動を展開し、とうかい 韜晦と婉曲語法を駆使し、もつと大がかりになると、オーウェル的な〈ニュースピーク〉の全システムを動員するだろう。「ニュースピーク」は、世論操作やイデオロギー操作に用

いるために、故意に曖昧にした言語のこと。オーウエルの小説『一九八四年』より)。プロパガンダ、韜晦と婉曲語法、ヘニユースピーク)、これらは、いずれも、実際に起こっていることを「制度的配慮」や「国家的威信」の名のもとに糊塗する手段である。

(エドワード・サイード 大橋洋一訳 一九九八『知識人とは何か』による。一部改変。)

問一 「真の知識人」であるためには何が必要か。「聖職者集団」と「俗人集団」を対置した比喩の意味合いもふまえ

たうえで、本文が「真の知識人」の要件として語っているものを、四〇〇字以内で要約しなさい。

問二 大学で知識と教養を身につけた人間は、日常生活の中で社会にどのようにかかわっていくべきか。本文を参考

にしつつ、具体的に八〇〇字以内で論じなさい。



